

トピックス

1. 連載開始「社労士への道」

2. 夏をあきらめて 白露～秋分の候



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 33

2020年9月号

夏をあきらめて 白露～秋分の候

処暑（8月23日頃）を過ぎても全国的に猛暑日が続いている。長雨で出遅れた夏が最後に大暴れといった感じ。秋の到来はまだまだ先のような。今年の夏はコロナ禍の中で何かと中途半端な夏だった。子供たちの夏休みも春の臨時休校の為に短縮され不完全燃焼の夏だったに違いない。感染拡大防止と経済復興の間で自粛と解除が入りまじる。本当にこんな非日常がいつまで続くのかと不安と焦燥にかられる。

夏が過ぎ秋が来る。コロナはどうやら季節変動には無関係のようだ。それでも秋はやってくる。早く朝夕の冷気を感じ草々に宿る白露をみたいものだ。頭を切り換えよう。しっかりと新様式の日常を身につけ「うつらない」「うつさない」を徹底しよう。冬になればインフルエンザの心配もしなくてはならない。人類は歴史上数度にわたりパンデミックを経験し、何とか生命をつないできた。人間の叡智はやがてコロナウイルスを克服するだろう。少々時間がかかっても、私達は必ず勝つ。



龍馬脱藩後の足跡（1）

脱藩後の龍馬の足跡は研究者によって明らかにされている部分が多い。この時期、龍馬は次々この時代において英明・賢人・要人と言われていた人に面談している。まずは松平春獄（前越前藩主）。江戸に出て千葉道場に転がり込んだ龍馬。文久2年（1862）閏8月22日の頃。江戸遊学中の土佐勤皇党崎哲馬らと会い、次に同じく土佐出身の岡本健三郎とともに常盤橋にある越前藩邸を訪ね、春獄と面会している。春獄は越前藩主で開明的な名君として重きをなした。橋本左内、三岡八郎（由利公正）ら有能な家臣にめぐまれ熊本藩の横井小楠を政治顧問としてからは、開国貿易、殖産興業に成功した。一橋慶喜を将軍継嗣に主導して安政の大獄により井伊直弼により謹慎に処せられたが後に政事総裁など歴任する。幕末の四賢候として知られる春獄に一介の浪人である龍馬がすんなりと会えたというのが不思議ではある。龍馬は土佐藩主山内容堂にも目通りできないような身分であった。

私なりの推測だが、やはり幕末、混沌とした社会情勢があつての奇跡であると思う。春獄の日記には、私は文久2年2月に政事総裁職となった。ある日朝、登城の前、突然2人の士が我が屋敷にきて私に会いたいと申し出た。会って話を聞いてみると、2人は熱く勤王攘夷の意を語った。またいくつかの私に対する心からの忠告を受けた。その熱意に私は深く心に感謝して、いつまでも忘れないと思った。勝海舟と横井小楠への紹介状が



熊本・高橋公園熊本城そば

横井小楠・坂本龍馬・勝海舟・松平春獄・細川護久

欲しいというので私は心よく引き受け紹介状を書き与えた。

(春獄日記・意識)

何という心の広さであろうか。会いたいと言う人があれば話を聞きその要望にも答える。いかに乱世とは言え、仲々ないことである。情報不足の時代であり、開明的な人ほど新しい情報や意見を聞く事に飢えていたかも知れない。しかし、あたってくださるじゃないけれど何という龍馬のあつかましさ。そして取り入ってしまう人間的魅力であろうか？龍馬の「人たらし」の面目躍如というところか。謎めいてるとはいえ龍馬が春獄と会った事は事実でありこれをきっかけとして勝海舟との出会いがありその門下に飛び込むといった龍馬の行動に移っていく。歴史は時として大きなトリックを見せてくれる。トリックという以外、言葉がでない。しかし痛快ではある。



播州日誌

「曼珠沙華」

別名 彼岸花。この花ほどくっきりと季節を彩る花はない。秋の彼岸（今年は9月22日）頃にぴたりと照準を合わせてくる。田や畑のあぜ道や、川の堤に群生している。あぜ道でよく見かけるのは、その昔、飢饉に備えて、非常食として植えていた名残だと言う。根は猛毒を含むがしっかりとアク抜きをすれば食用になるという。その毒々しいまでの花の色は地獄の業火のようにも見えるし、亡者の血の涙の色にも見える。遠目に見るとメラメラと燃えあがる炎のようにも見える。律儀に咲くこの花を見るたびに、不慮の事故で若くして逝った姉の事を思い出す。人一倍明るく活発で学校でも何かと派手で目立っていた。歌が得意で、ひばりの「悲しい酒」など身振り手振りがそっくりであった。四十年を経ても尚、その声と姿がよみがえる。姉がこの世に思い残した事は何だったんだろう。最期に子供達の名前を繰り返していたと聞いたが、さぞ無念であったと思う。花の色は亡き人の怨念の炎の色かも知れない。



2019.9.20

「コロナ禍で見えてきたもの その2」

日本は戦後75年にわたって不戦を貫いた。世界中で今だに内戦や紛争が続発する中、日本はとにかく平和を維持した。コロナ禍で見えてきたものはズバリ日本人の平和ボケ。金さえあれば何でも手に入ると錯覚している人のいかに多いことか。総理大臣がこう言った。官房長官がああ言った。知事が市長が、そして専門家がどう言った。整合性がない。政治が悪い、国が悪い。自分じゃなくて、すべて他人が悪い。前を向かずに後向きの人がやたらと目につく。国家には、国民の命と財産を守る責任がある。なる程。だからと言って、コロナ対策が無為無策だとか、方向性が見えないとか、文句ばかり言っていて何か解決するだろうか。幼児や児童生徒、高齢者は別だが現役で働いている人であれば「自分の体は、自分で守る」を徹底すればよい。お盆の帰省は一律に規制しないが、できれば自粛が望ましい。政治家はこの程度しか言わないし、又、言えないのだ。公助、共助、自助とよく言われるが、長びくコロナ禍の下では、自助努力が最も大事だと思う。決して国をあてにしてはいけない。



2020.9.20

「社労士への道」連載にあたって

はじめに

これは、社会保険労務士の「成功談」ではない。脱サラをしてというより、激しいいじめとパワハラで会社を追われ、はからずも社労士への道を歩むこととなった、一人の社労士の生き様である。未知の世界、マイナスからの出発。顧問先ゼロの状態から二十余年の歳月を越え、生き延びてきた社労士が、古稀を二つ三つ超えた年齢に至って、是非とも書き残しておきたい事どもを書き綴ったものである。

「生きた証（あかし）」としての本書は、万感の思いを込めて書き上げたものだが、読者の皆様がどの様な感想を持たれるかは全く想像もつかない。最後まで読んでいただける自信もない。

ただひたすらに生きた二十余年を、社会保険労務士という「士業」にかけた一人の人間の営みを、赤裸々に綴ったものであり、総て事実に基づいたものです。

コロナ禍の中で人々は否応もなく新時代での新しい生き方を模索しています。これを機に世の中のすべてが、IT・AIの時代に突き進む事になると思います。士業として生き残れるかどうか、まさにサバイバルの時代に突入していきます。一、二号業務は電子化し三号業務に活路を見出しついかねばなりません。コンサルタント業としての社労士に進化していかねばならぬのです。デジタルとアナログ、この真逆な状況の中で、人類につきつけられているのは人間性喪失という大きな課題。そんな時代だからこそ、こんな社労士が存在していてもよいのではないかと、そんな気持ちがこの物語を書かせた。そうこれは物語です。ささやかな私の思いが、読んでくださる方の、何かのヒントをみつけるきっかけとなれば、これ以上の幸福はありません。

社労士への道 『退職』

「とりあえず明日から事業部の方へは、出なくていいから」

「ゆっくりと休養をして、自分で今後この会社に何ができるのか、一度考えてみて欲しい」

「長いこと休みもとってないんだから」「一週間でも、一カ月でも休みをとって」

平成六年十月三十一日、午後。S社、社長室。

社長の話の途中から、私はその声を遠い空の彼方から響いてくる音のように聞いていた。二十三年間のサラリーマン生活。青春の時を過ごした幾春秋。営業部長、子会社の専務、再び別の事業部の部長。苦楽を共にしてきた(つもりだった)社長からの通告。一瞬、時間が止まり、思考が停止した。

「そこまで言われるのなら、私の方から辞めさせてもらいます」

頭の中は混乱していたが、私の口から出た言葉は冷静でしっかりとしていたと思う。

「やめてどうする」「それは私自身の問題ですから」

その後のやりとりも意外とはっきりと覚えている。

「やめるにあたっての条件があれば」「できれば有給休暇の消化と、退職金の満額支給を」

すらすらと言葉がでる自分が不思議だった。待っていたように総務担当常務が呼ばれ、その後専務と営業担当の常務が呼ばれた。

「辞めると言うのは、言葉のはずみじゃないのか」「はずみなんかでそんな大事なことは言いません」

私は日常の心構え(信念)として、会社にとって必要な人間、役立つ人間か或いは逆に会社にとって邪魔な人間、辞めてほしい人間でありたいと思っていた。少なくとも「居ても居なくても、どちらでもいい人間」にだけはなりたくなかった。

「退職の日付はどうする」「一週間ほどの引継ぎを考えて、十二月二十日」

とんとんと事務的な話は進んだ。それ以上の強い慰留はなかった。



「長い間お世話になりました」

わずか三、四十分の話し合いの最後の言葉が、その後、妻や家族に多大な迷惑と苦勞をかけることになった。

直前の一年間にその予兆はあった。社長の息子さんの入社、その元上司の常務としての入社。当然の如く、事の善悪ではではなく、会社経営上の方針や運営が、中間管理職の私との間で大きなギャップになっていた。それは日が経つにつれて大きく深くなっていった。無謀に近かった資格取得・独立への思いは心の深層にはあったが、その時点では確かな形にはなっていなかった。それが失業したことにより、一気に現実の目標、しかも短期間に果たさなければならない目標となった。

十一月に入って、早速、大阪の受験校に通学の手続きをとる。業務の引継ぎや、各方面への挨拶、何かと多忙な日が自分や家族の思いとは無関係に夢のように過ぎていく。十一月下旬から通学を始める。あっという間に会社最後の日がきた。十二月二十日。正式な退職届その他書類を持って会社にでかける。

上司の殆どは不在だった。何人かの人は涙まじりに別れを惜しんでくれたが、嘲笑を含んだ冷たい目の人もいた。屈辱感と失意と。通いなれた正門を出た時、ぐらぐらと大地が揺れて目眩のようなものを感じた。振り返り万感を込めて、「ありがとうございました」と頭を下げた時、不覚にも涙がこぼれた。大きなものを失ったような、心臓にぽっかりと穴が空いたような喪失感。一方でもう通う事のない会社からの解放感。なかったとは言えない会社への恨みつきらみ。深い虚脱感のなかでしかし、これでよかったんだと自分に言い聞かせていた。自分を辞めさせた会社に負ける訳にはいかない。「あいつを辞めさせたのは失敗だった」と言わせてみせる。つまらないそんな思いも当時には確かにあった。結果としてこの離職が、怠惰で軽薄でいい加減だった自分との、最初の訣別であったことを痛感することになる。(以下、次号)

STOP! 転倒災害プロジェクト

厚生労働省と労働災害防止団体では、転倒災害を撲滅するため「STOP! 転倒災害プロジェクト」を推進しています。

STOP! 転倒 検索

事業者の皆さまは、職場の転倒災害防止対策を進めていただくとともに、適時にチェックリストを活用した総点検を行い、安全委員会などでの調査審議などを経て職場環境の改善を図ってください。

転倒災害の特徴

特徴1 転倒災害は最も多い労働災害!

休業4日以上労働災害、約12万件のうち、転倒災害は約2.8万件と最も多く発生しており、近年増加傾向です。

特徴2 特に高年齢者で多く発生!

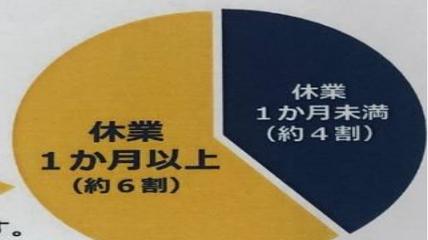
高年齢者ほど転倒災害のリスクが増加し、55歳以上では55歳未満と比較してリスクが約3倍に増加します。

特徴3 休業1か月以上が約6割!

転倒災害による休業期間は約6割が1か月以上となっています。

特徴4 冬季に多く発生!

降雪の多い地域では、冬季に多く発生しています。



「平成29年転倒災害による休業期間の割合」労働者死傷病報告(厚生労働省)より作成

転倒災害の主な原因

▶転倒災害は、大きく3種類に分けられます。皆さまの職場にも似たような危険はありませんか?

滑り	つまずき	踏み外し
 <主な原因> <ul style="list-style-type: none">床が滑りやすい素材である。床に水や油が飛散している。ビニールや紙など、滑りやすい異物が床に落ちている。路面等が凍結している。	 <主な原因> <ul style="list-style-type: none">床の凹凸や段差がある。床に荷物や商品などが放置されている。	 <主な原因> <ul style="list-style-type: none">大きな荷物を抱えるなど、足元が見えない状態で作業している。

転倒災害防止対策のポイント

▶転倒災害を防止することで、安心して作業が行えるようになり、作業効率も上がります。

4S (整理・整頓・清掃・清潔)	転倒しにくい作業方法	その他の対策
<ul style="list-style-type: none">歩行場所に物を放置しない床面の汚れ(水、油、粉など)を取り除く床面の凹凸、段差などの解消	<ul style="list-style-type: none">時間に余裕を持って行動滑りやすい場所では小さな歩幅で歩行足元が見えにくい状態で作業しない	<ul style="list-style-type: none">移動や作業に適した靴の着用職場の危険マップの作成による危険情報の共有転倒危険場所にステッカーなどで注意喚起